

日本人が「鑑」にする英傑たちの
言葉と行動が大集結！

完本 名将言行録

おかのやしげね
岡谷繁実 著

全5巻

戦国から江戸時代そして幕末
戦に勝ち抜き、世を治め、民と時代を導いた
名将——偉並んだ218人

膨大な文献・記録に散在する事蹟・言動・逸話・エピソードを
人物ごとに取り分け、編集しまとめあげた、驚嘆すべき大著

「名将はその時、何を思い、考え、行動したか」
日本史上の傑物の「人間像」を鮮明に伝え遺す
知る人ぞ知る名著の原典を初めて「完本」で複製！

2025.10

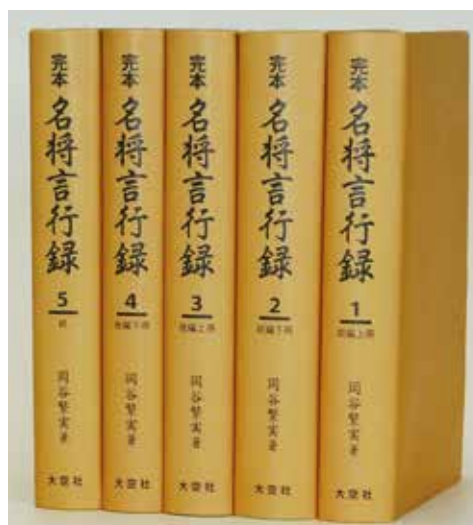
残部
僅少

[大空社 2016 年 2 月発行]

A5 判・上製・クロス装・総約 2,900 頁

978-4-283-01323-0

定価(本体 98,000円 + 税)



学術資料出版
大空社出版
www.ozorasha.co.jp

eigyo@ozorasha.co.jp

TEL: 042-306-3383 FAX: 042-306-3384

東京都東村山市秋津町5-24-13-101
(〒189-0001)

現代日本人の生き方の「範」がここにある！

信念、覚悟、熟慮、分析、批判、判断、決断、心理、意思、感情、信頼、本音、策略、反逆、交渉、勝負、迷い、驕り、過信、錯誤、失敗、懊悩、反省――

一回かぎりの特異な経験を、人間共通の英知に昇華させる人が
名将と呼ばれてきた。その言行には生き方の神髄が結晶している。

“人間の器量は、その言行にこそ^{あつわ}顕れ出る。”



*名将の署名・花押（本書原本の見返しより）

■勝ち負けを超越した生きる指針
あなたの真の座右の銘を
見つけ出せる宝庫！

「現代」日本人は戦国時代から」と言われるほど、この近世という時代の人々の感性、ものの考え方は身近である。何より多数の小説、劇、ドラマなどの源泉となっていることがその証しである。
実は、それら創造活動の多くを支えていた「情報源」の中心に本書があった！
知る人ぞ知る事実である。
不朽の名著を初めて完全な形で提供！

【著者】岡谷繁実（おかのや・しげざね）

天保6（大正9）（1835-1930）。山形生まれ。

上野館林藩士（中老）。藩主秋元志朝のもと、勤王家として活動。『名将言行録』は、明治初年に十数年かけて30巻を、その後増補され70巻（以上、和本）とし明治29年に活字版4冊が刊行され、さらに続編を執筆刊行した。1400部を越す膨大な文献からまとめあげた3千頁に迫る労作である。

従来、『名将言行録』の収録人数は続編を加えず192人収録とされるが、今回の（完本）で初めてその全貌を読むことができるようになった。

岡谷繁実著『完本名将言行録』全5巻

【複製原本】

- 1 名将言行録・前編上冊
- 2 名将言行録・前編下冊
- 3 名将言行録・後編上冊
- 4 名将言行録・後編下冊
（以上、明治43年1月刊8版（初版明治29年11月、帝国青年教育会刊、文成社発売）
- 5 続名将言行録（明治44年5月、文成社刊）

序Ⅱ大隈重信、秋元興朝、梅謙次郎、田口文之

（第1巻収録）

■『名将言行録』（岡谷繁実著）は、後年、簡約・抜粋訳編版、現代表記版など形を変えて数種出版された。しかし、そのいずれにも『続名将言行録』（本書第5巻）は収録されていない。ここに（完本）として複製刊行するゆえである。

* 諸版の内容比較は、『完本名将言行録』活用・必携（本案内最終ページ参照）に収録。

原典複製は全5巻とも初！

壯觀

武將、軍師、將軍、大名、諸侯、藩主
智將、參謀、名君、忠臣、賢臣 ...

総勢
218
人

■収録全人名 (五十音順)

5巻
表記版、
らず、
法

第5巻(続編)は諸種の復刊本(現代表記版、抄録版など)に収録されておらず、今回初めて複製された。(岩波文庫版、人物往来社版などでも読むことはできない。従来諸版で「漏れていた」、しかし重要な人物が詰まった貴重な巻)

驚異

総計約1400部★膨大な文献を渉猟

★第1～4巻の引用書目数1251部に第5巻「続」の書目157部（一部重複）を加えた部数。

これほど便利な

今でも使える
古びない

人物情報・歴史書はない！

しかし、本書があれば、いまさら万巻の書を読む必要がない！

これほどの偉業、二度と独力では決して成しえない！

＊およそ「人」の言行が知られる文献をくまなく読破し
人物ごとに話を整理、編集しまとめあげた！

名將言行録引用書目	
北條五代記	北條
北條盛衰記	關東兵亂記
實隆公記	大乗院寺社雜事記
關侍傳記	新編相模風土記
長祿己未申次記	江亭記
國府臺軍記	潮田某筆記
山中氏祖廟記	今川記
増補高井家記	阿州將府記
龍造寺記	九州治亂記
備前軍記	大友記
元就軍記	毛利舊記
吉川史臣略記	藤記
信府記	信府統記
妙法寺記	新義軍記
高代寺日記	武田三代記
甲斐記	
尾張合戰記	尾張合戰記
土岐家系記	御前殿上日記
若狹守備代記	佐々軍記
天竺傳記	石川忠雄傳記
今歩守備代記	本多四郎傳記
武家系記	武家系記
通計千二百五十一部	

(19頁にわたる引用書目リスト)

※引用書目の種類

- 軍記
- 合戦記
- 軍功記
- 戦功武勇伝
- 伝記
- 日記・日録
- 実録・実記
- 見聞録
- 事蹟録
- 逸事異聞録
- 嘉言善行録
- 語録
- 行状・武談
- 一代記
- 武鑑
- 兵法書
- 年代記・編年史
- 藩史
- 盛衰記
- 家記・家伝
- 系図・系譜・家譜
- 創業記
- 雑史・雑記
- 考証
- 地誌・風土記
- 紀行
- 寺誌
- 縁起
- 古城記・城史
- 名所旧蹟記
- 名所図会
- 令法集
- 逸話集
- 咄本
- 物語・説話
- 随筆
- 故事
- 歌集
- 漢詩文集
- 節用集
- 教訓記
- 覚書・談話・聞書
- 書簡
- 由緒書
- 碑銘
- 名鑑
- 年表
- 目録
- 等々

賞賛

序より（現代表記に変えた）

開国以来欧米の新文物^{どうとう}滔々として流入し来りしが、採長補短の能に富める我が国民は、能く其の英華を吸収して、現代の文明に応用した所が甚だ多いのである。然し利害相伴うのは人事の通弊であつて、其の短所は物質的文明の弊に流るゝの傾向を生じ、嘗て封建時代に於て、祖先が死生の巷に出入して益々練磨砥礪した所の、我が国民の特性たる至誠忠愛、克己忍耐、犠牲献身、名譽廉恥というが如き精神的美德は、次第に消沈せんとするの趨勢がある。是れは我が国運興隆の今日、大いに憂うべきことである。然るに本書の如き有益なるものが、再び翻刻せられるのは、最も時弊に適中したことで、眠れる国民性を喚起し、国家の元気を鼓舞するに、少からざる効果のあることと思われて、我輩の大いに喜ぶ所である。

明治四十二年十一月

伯爵

大隈重信

*

凡そ如何なる事業にても人に秀でたる働をなす者は其平素の心掛に自ら人に異なる所があつて、其一言一行は以て世人の訓戒、模範となすに足るものが多いのである、殊に戦場に往来して^{しばしば}死生の間に出入した人の言行は之を聞けば^{だふ}懦夫をも起たしむる力を有するものである。（後略）

明治四十二年冬

法学博士

梅謙次郎

- 膨大多種な文献資料に散在して伝わる言行・挿話・エピソードなどを名将ごとに集め、1話ずつにまとめあげ、列挙してゆく。名将が生涯のどの場面で誰と出会い、どういう言葉を発し、行動したか…、同時代また後世の人がどう名将を捉え、伝えたか。著者は名将を評価・断定するのではなく、読者にその人間性を事実として知らせることに徹している。簡潔で生彩ある文が人間＝名将の輪郭を際立たせる。

■その人柄を具体的に知る情報は、事典・研究書・伝記や小説などではすぐにつかめない。本書の威力は絶大である。

「言行ヲ知ルヲ主トシ、履歴ヲ叙スルヲ主トセズ」

(本書「凡例」より)

—この精神で徹底して貫かれた叙述だから、何十年、何百年経ても不朽の名著であり続ける。



名将言行録卷之一

○北條長氏

館林 岡谷 繁實 輯
江戸 田口 文之 評
飢肥 安井 衡 閱

名将言行録卷之一 北條長氏

伊勢新三郎行長の子、新九郎と稱す、備中の人なり。北條氏を冒し、後髪を削り、早雲庵宗瑞と號す。流離瑣尾の身より起り、竟に伊豆相模を平げ、韭山城に住す。初め氏茂後、今の名に改む。永正十六年八月十六日卒、年八十八。

應仁中、山名細川各私黨を樹て京師に鬭ふ。將軍義政制すること能はず。長氏聰明にして大志あり、騎射を善くし、鈴韜に通じ、陰に財を散じ、豪傑に結ぶ。一日衆を集めて曰く、熟く天下の事を考ふるに功名を成し、富貴を取るは今に在り、意ふに關東八州、地勢高爽にして、士馬精強なり。古より武を用ふるの地と稱せり。且つ永享以來



冒頭に生涯略述

原寸

- 見本「北條長氏」の項は15頁にわたり長短18の挿話を収めている。

「真田幸村(信繁)」

「名将はその時、何を思い、考え、行動したか」

感動とともに優れた「人間智」を噛みしめる！

名将言行録卷之四十

○真田幸村

安房守昌幸の二子、源五郎と稱す。後左衛門佐と改む。慶長五年高野九度山に整居し、好白と號す。元和元年五月七日戰死。年四十九。
天正十三年、徳川の兵上田城を攻む。幸村時宜を祭し、林間より出て横撃す。烏井元忠

縮小

度々付回はしたり、七日の四つ時分には負けたりと、弱音を出たし候へば、傳長老合戦御勝なり、破軍の巡り能くなりしと言ひ、長老一人いきりたりと言はれしとぞ。

幸村の首實檢に出し時、家康、左衛門にあやかり候へと言はれて、其頭髮を抜て取らしめしとぞ。幸村戰死せしかども、家臣に一人の降參せし者なし、日頃士を養ふの

名将言行録卷之四十 真田幸村

千三百三十九

●家康

「真田幸村」の項は、1323〜1342頁約20の項目にわたり幸村の言行が記されている。

善ければなりと、人皆感歎せざるはなかりけり。

幸村嘗て曰く、我家にて、軍評定の時若し兩議ありて、何れへか定めんと決し難き時

は、一座の諸士に向ひ、此義は大切の事なれば、惣大將に、伺奉らんと、右の二議を書付け密に室に入り、一徳齋の像に香華燈を備へ、彼書を捧げ、其身謹みて禮拜し、偕

闇を以て、其闇次第に兩議の中を極むるなり、是にては我も疑ひなく、又兩議言出す人も大將の依怙ならぬを知り、諸卒は當家祖神の教なりと勇むこと限りなし、

然れども何事も闇次第と言ふにはあらず、兼ねて詮議に己を盡し、猶運を鬼神に伺ふ所なり、總て我を用ひず物に寄りて行ふ時は、假令其事に越度ありても其人

に預らざるの徳あり、時代と人の替はりはあれども、良將の心は、其趣一なることを信ずべし、當時祿と名を求める俗儒の知る所にあらずと。

幸村、人に語て曰く、凡そ家臣程油斷のならぬものはなし、親子兄弟の間にては偽り多し、或は利に迷ふことあり、然るに家人は血を分けたるにもあらず、只恩義に感じ、又は勢に恐れて下知に隨ひ、命をも呉れることあれば、能く心を用ひ察すべきことなり、余古より今に至るまでを考るに、一々言難きことなれども、昨日まで忠

千三百四十

●見本のように、「言行録」とは
当人の言葉や行動だけを記したものではなく、
同時代および後世の重要な評言をも含んでいる。



肖像は名将の参考イメージです。(本書には収録されていません)

大坂の陣、豊臣家に殉じて無念の戦死を遂げた名将＝真田幸村
その生涯から、後世が汲み取るべき「人間＝幸村」の勘所が、
一話一話に凝結されている。

義の士と思ひ居たる者も、主人の好む事替はれば、忽ち其風に移りて機嫌に叶ひ、
幸を得んと思ふ、其中に偶々真忠の者ありて諫言することあれば、大に耻かしめ
に逢ひ、又は妻子までの難儀となり、家名を汚せば、大方なる忠義の者と云ふとも、
後を考へ、日々押移るものなり、又忠臣にても一旦耻を受けては、主人を恨み憤て
邪佞になる者も儘あるなり、其故は少し諫言をすれば、機嫌悪しく、萬事常に替は
れば詮なきことに、家名を墜さんよりは能き程にして、時に従ふが善しと、了簡し、
勤を餘所にするものなり、又或は傍輩のことより主人にも恨を含み、巧みて主人
の機嫌に合ふ様にもてなし、悪しきことを勸めて主人に悪名を與へ、傍輩にも耻
をかつけ、自分は身の落付を拵へ置、能き時節に身を引て、主人や傍輩の難儀を笑
ふ者もあり、兎角に頼母敷思ても油断することあるべからず、常に眞實を以て理
非を考へ、悪しき道に引入れず、又悪きことを爲さぬ様に心を付べし、少しの相談
にても、身の樂になることを言ふ時は、其樂の筋を計て、心に叶ふ様にして、身を立
んとするものなり、内背を見られて扱はれ者にならんは口惜からずや、誠を以て
國の爲め、君の爲めに爲す者、萬人に一人もあるべからず、重き位にあるとも、斯の

名将言行録卷之四十 眞田幸村

千三百四十一

千三百四十二

如きの境を辨へ、君をも諫奉り度と。

徳川光圀曰く、幸村神祖に敵對し、常に村正の刀を帶す、村正は徳川家不吉の刀故、調

伏の意と聞及べり、武士は斯く平生心を盡すこそ、眞の人臣とも言ふべきなりと
稱讃せられけり。

○眞田幸昌

左衛門佐幸村の子、大助と稱す。元和元年五月八日殉死、年十六。

大阪夏役五月六日、天王寺口の戦に、幸昌組討して取りたる首を鞍の四方手に付け

●徳川光圀曰く…

原寸

各種事典・研究書・伝記や小説などを読んでも、
すぐにはつかめない情報に満ちている！

